

し長刀とらせられ立せ玉へば、忠政も直勝も恐入て御前を逃去ぬ、後にまた敵此橋より夜討せ
んも計り難し、怠なく守れと命せられしが、四五日過て塙圍右衛門直之、此口より阿波津へ夜討
をまかけけると也、

〔都紀行〕十二日○文久四年五月、中略、高麗橋に至れば、橋の町家に、城郭にひとしき、矢倉ニツ有、

〔松葉名所和歌集〕十二、幸橋 同（伊勢）藻鹽

〔國花萬葉記〕九、伊勢、さいはいの橋 名景不見

〔松葉名所和歌集〕十二、幸橋○中略

名寄 頼もしき名にも有かなみてゆかばまづさいはいの橋を渡らん 貳太宰大高遠

〔詠大神宮二所神祇百首和歌戀〕思

祈津々猶再拜ノ橋柱立名モクルシオモヒヤマバヤ

再拜ノ橋トハ、倭姫命天津尊ノ御鎮坐ノ山之ハラ御覽坐、彼橋ニテ拜有シ事ヲ名トス、再拜ト

書テ二度拜スト讀、

〔元長參詣記〕爰纏向珠城宮御宇、倭姫皇女下樋ノ小川橋ニテ御解除有しに依テ彼橋ヲ再拜ノ

橋ト云、伊勢ノ國歌枕、仁幸橋讀如ク、再拜ヲ幸ト和儀也、

〔神都名勝誌〕一、下樋小河

中世上河と稱せしならむ、永享參詣記に、永享五年彌生廿日、うへ川。の橋。と申す所にて、旅人の
影さへ見ゆる渡かな春引く水の上河の橋と詠せしは、此の河に架せる橋なり、さて江家次第
中右記等にも、また下見橋のことあり、神名秘書には、下樋橋と云へり、此等の書にいふ下見橋
は、即勅使祇承の交代する所なれば、うへ川は即下樋小川の別名にて、下見橋は下樋橋なるこ
とを察知すべし、

伊勢國
再拜橋
下樋橋